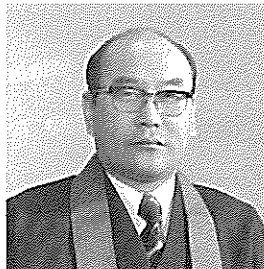


点描

北海道50年の歩み—真宗同朋会運動— No.12

1975
昭和50年

教区定例拡充審議会の中心と
なった両瀬正男教務所長

教区定例法座 いのちある定例の再生に向けた歩み

一九七五年(昭和50)、北海道教区教化委員会(委員長Ⅱ両瀬正男教務所長)は、定例法座が時代とともに生きる定例線となるよう、今一度考えを新たにしなければならぬと見定め、特別審議会「教区定例拡充審議会」を設置した。審議会の構成は、地区代表として宮本哲雄、楠修、多屋寛、安本順海。講師代表として山本良超、加藤真、吉田法純。布教使代表として川井正順、室川東史の各氏が委員に委嘱された。

* このメンバーによって行われた座談会が審議会発足直後の「北海真宗」11月号に掲載されている。これは一九六七年(昭和42)の「定例白書」のさらなる展開を期するもので、委員による座談をほぼ紙面に反映させ、これを白書とするものである。

内容は、従来から指摘されている講師の問題、宿寺の問題が継続

して取り上げられている。

当時、八線あった定例線の法礼は、一日三千円から五千円であった。また、「北海真宗」に掲載された講師が来ることを予定して、保育園の保育士や母の会を計画しても、講師の都合で他の人が来ることもあり、危なくて計画ができな

いといった発言が乱れ飛んでいる。これは現在の定例も同じ問題を抱えている。定例は人を育てていく場ではない。開席寺院の住職として、確信をもってご門徒に声をかけていきたいという切実な声も挙がっている。かつて暁鳥敏師が詠われたように、準備される布施は「二セ金でない」。

* また、座談では「移入講師(他教区の講師)は問題が多い」という点も指摘されている。現代社会の問題に对应していけぬものが多いという。この問題に対して、かつて教区は、教区外講師を排除して教区内の講師のみで定例法座を実施されたこともあった。

長年、法話を中心とした活動を行ってきた北陸の講師は、法座に人が集まらないのは、講師の責任

だと述べられていた。法話に向けた準備を怠らないことは勿論のこと、当日を迎えるまでにご門徒宛にハガキを送っておられた講師も多くおられたようである。

* さて、教区定例拡充審議会では、全寺院を対象にアンケートを実施。結果は継続希望がほとんどで、新規加入を含めると従来の八線では対応することができないことが判明し、一般通年九線・季節一線に改編されることとなった。また、白書によって宿寺の待遇は大きく改善されていった。

審議会は、定例が教区に一任されていることがマンネリ化の第一因であると痛感したという。「どこ

こまでも主体は宿寺にあり、組教化委員会こそが運営の直接責任者であることが望ましい」とする報告書がまとめられた。その結びは「真に教区人の手に依って、展開の第一歩が踏み出された」である。

今も教区定例が寺院教化の重要な位置を占め、かつ問われていることに変わりはない。いかなる出発を期していくのか。要にその本を求めていかねばならない。